

## 田中先生ご退職によせて

東日本旅客鉄道株式会社仙台支社  
郡山土木技術センター

林 博基

私が最初に田中先生とお会いしたのは、2008年4月に田中先生が総合防災情報研究センター（以下、CIDIRという）設立の挨拶に、弊社の本社に来られたのが初めてでした。当時、私は安全対策部（現在の安全企画部）で2008年4月より新規に設置した防火・防災グループに配属となり、防災担当者としても職務を始めた時でした。そのため、私が災害情報の分野に携わると CIDIR の設立が同時期でした。

CIDIR でのライフライン・マスコミ連携講座が始まり、定期的に顔を合わせるようになりました。連携講座は、概ね毎月実施され、防災分野で先端を行っている先生や国等で実務を担当されている方の講演を聞くことができました。田中先生の人望があるからこそ、実現できた講座でした。さらに、講座によっては、各社の取り組みや、災害発生時の対応についてディスカッションを行い、他のライフラインの対応について各社の担当者が知識を増やすと共に、各社の防災対策の強化に役立てることができました。

2015年1月24日に東京大学武田先端知ビル武田ホールにて日本災害情報学会主催のシンポジウム「阪神・淡路大震災から20年—今、ライフラインはどうなっているか—」が実施されました。私も登壇者の1人として出席しました。座長の田中先生のアイデアにより、ライフライン各社が事業（供給や運行）等を継続する会社等と停止する会社等があることを明確にしたこと、各社への理解が深まり、有意義なシンポジウムとなりました。

最後に、センター長をご退任後も、体を大切にされつつ、引き続き防災への指導して頂ければと思います。



日本災害情報学会主催のシンポジウム（2015年1月24日）

## 忘れられないシーン

東日本電信電話株式会社 ネットワーク事業推進本部  
サービス運営部 災害対策室（兼ネットワーク統制室）

芳賀 一夫

『危機感が人を動かすんだよ、危機感を持たせる情報が避難行動につながり人を救えるんだなあ・・・』2010年の暮れだったと思います。ライフラインマスコミ連携講座終了後、恒例の「佐とう」での思い出です。講師の先生が席を立たれた時に、田中先生が隣にいた私の肩に手を沿え、振り向きざまに真顔でボソッとつぶやかれたことが頭から離れません。

翌年、東日本大震災が発生し、応急復旧が概ね落ち着いた5月中旬、私は東北に通信設備の本格復旧等を担うために新設された組織に赴任しました。瓦礫が散乱する沿岸部周辺をはじめとする被災地での作業や工事が大半で、全国から集まった社員等の安全確保が組織共通の最初の課題でした。

発災から数か月が経ち、季節が変わり草木が生い茂って瓦礫が視界から消え、灰茶色だった被災地が明るい緑に変化してくると、生々しい津波の爪あとも薄くなるせいか、支援者の多くは津波注意報が発せられても周囲の人の動きにあわせて行動し、避難せずに作業を継続する場面が見られました。防潮堤が破壊され、津波に無抵抗な状態の中で、どのように避難を徹底させるか思い悩んでいた時に、フわっと頭に浮かんできた映像が「佐とう」での1シーン。田中先生の真顔と『危機感が人を動かすんだよ・・・』の言葉でした。これをヒントに、作業開始前の危険予知活動において、自分が作業する場所で何が起き、どれ程、危険な所にいるのか声に出して再認識して津波に対する恐怖感をもって作業に入る、そんな動作を加えたところ、周囲に惑わされない自主的な避難行動を定着させることができました。

「佐とう」で大変印象深く刷り込んでいただいた先生の言葉のおかげです。大変お世話になりました。今後も多様な場面でご指導いただければ幸いです。

## 田中先生の印象 Before / After

東京大学地震研究所 教授 古村 孝志

2008年4月に創立されるCIDIRに地震研から異動が決まったころ、ある会議で田中先生に初めてお会いする機会がありました。3月中旬の、都心で桜の開花が報じられた頃のことです。以前から田中淳教授のご高名は存じ上げておりましたが、なんなく四角い黒縁眼鏡をかけた長髪の気難しい学者先生をイメージしていました。

ところが、「私が田中です」と挨拶された先生は、グレーのスーツにフレームレスメガネが光るダンディな紳士。CIDIRの明るい未来を確信した瞬間でした。

しばらくして、高知県四万十町の津波避難行動調査のヒアリングに同行する機会がありました。そこでは、避難率が高かった意外な事実を知ることになるのですが、それはさておき、田中先生の話を続けます。高知龍馬空港から四万十町までの車内では、Webアンケートとインタビュー調査の精度やクロス集計を想定した調査項目設定などの打ち合わせが、いつのまにか幼少期に高知に来た時の話、大学での奥さんと出会い、シンクタンク研究員として大学人へ、さらにどこでどう話が繋がるのか、船でしか行けない秘湯大牧温泉の観光まちづくりの話と、先生のこれまでの多彩な経験と研究者への長い道のりを、実際に楽しくお聞きすることができたのでした。

その長話が理由かどうかわかりませんが、町役場でのインタビューの時間に遅れそうになり、昼時で混雑するうどん屋に駆け込み、カクカクしかじか事情を訴え注文の順番を割り込ませてもらいました。店のおばちゃんが「特別よ」と先生に目配せして運んでくれた熱いうどんを急いで搔き込むと、今度は約束の時間まで間に空いてしまいました。「アイスコーヒーでも頼んで一息つこうか」と言う先生をせき立て、まだ注文が届かない客の視線を避けるように急いで店を出ましたが、流れで支払いは田中先生持ちになりました。

田中淳先生のイメージ（Before, After）

## 田中先生との出会いと思い出、そして皆様へのお願い

総合防災情報研究センター 教授 目黒 公郎

私と田中淳先生との最初の出会いは1993年らしい。「らしい」というのは、私は覚えておらず、後に田中先生に指摘されたのだ。2人が会った理由は、消防科学総合センターの「地域防災データ総覧—災害アンケート編—（1994年3月刊行）」の委員になったから。当時、田中先生は文教大学情報学部専任講師で38か39歳、私は本学 生産技術研究所（生研）の助手で30か31歳であった。私としては編集に謙虚に励んだつもりだが、田中先生は「随分ズケズケと物を言う生意気な若造だ」と思ったそうだ。次にお会いしたのは、1999年8月のトルコ・コジャエリ地震の被害調査で一緒とした時。一緒のホテルで寝泊まりしたのでよく覚えている。そしてまた時間が経過し、2006年に廣井脩先生がお亡くなりになり、先生の資料をコアに災害情報に関する研究センターを、情報学環（学環）と地震研究所と生研が協力して設立する話が出た。私は、当時の前田正史生研所長の指示で研究センターの企画書を作成した。2007年には人事の話が出て、当時の吉見俊哉学環長とお会いして人選の話をした。そして、2008年4月に総合防災情報研究センター（CIDIR）が正式に立ち上がり、田中先生はセンター長に、私は生研からの運営委員になった。そして、2010年4月には総長戦略ポストを得て、私は情報学環の基幹教員になった。この度の田中先生の定年退官に際し、CIDIRをここまで牽引してこられた先生のご尽力に深く感謝するとともに、CIDIRニュースレターの読者の皆様には、田中先生が卒業された後のCIDIRにも、これまでと変わらぬご理解とご支援をお願いいたします。

### 編集後記 CIDIRの窓から

田中センター長のご尽力のもと、CIDIRは設立以来、拡充してきました。この10年で、東日本大震災や西日本豪雨災害、様々な災害が発生し、そのたびに災害情報の新たな課題が生まれ、CIDIRはそれらについての研究を進めています。田中センター長はこれらの成果をもとに、日本の防災対策を牽引されてきました。田中先生におかれましては、一度、一区切りにはなりますが、立場は変われど、来年以降も引き続き、日本の災害情報、防災対策の進展、そしてCIDIRの研究に対してご指導いただきたいと思います（閑谷）。



CIDIRニュースレター vol.47 2020年3月1日発行

東京大学大学院情報学環総合防災情報研究センター

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 TEL: 03-5841-5924 FAX: 03-5841-0379

MAIL: cidir@iit.u-tokyo.ac.jp http://cidir.iit.u-tokyo.ac.jp/

# CIDIR Newsletter

サイダーニュースレター

CENTER FOR INTEGRATED DISASTER INFORMATION RESEARCH

第47号 2020.3.1

Nov.	Dec.	Jan.
2	3	2
6	4	9
7	5	11
9~12	7	13
11	15	15
15	16	16
16	22~23	27
22~23	24	29
24	3	3
26	4	4
27	5	5
29	7	7
Dec.	9	9
3	11	11
4	25	25
5	25	25
7	25	25
9	25	25
14	25	25
24	29	29
29	29	29

## Contents

特集：田中淳センター長のご退職に寄せて page.2~4  
編集後記：CIDIRの窓から page.4

# 田中淳センター長のご退職に寄せて

## 講義「災害情報論」の思い出

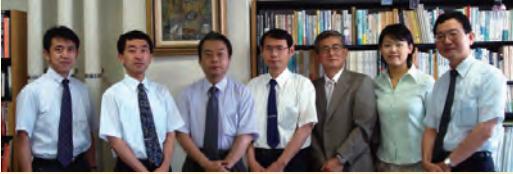
国立研究開発法人 土木研究所  
水災害・リスクマネジメント国際センター 大原 美保

私は、2008年6月1日から2014年3月31日までの6年間、情報学環・総合防災情報研究センター(CIDIR)にて、センター長の田中先生にお世話になりました。田中先生との思い出は沢山ありますが、中でも、情報学環・学際情報学府の大学院生向けの講義「災害情報論」について、寄稿したいと思います。

「災害情報論」は、CIDIRの教員及び外部からお招きした専門家が各回を担当するオムニバス形式の講義で、私も何コマが担当していました。私は、東京大学生産技術研究所との兼務という立場でしたが、「災害情報論」の講義を通して他の部局の先生方のお話を拝聴することができ、大変勉強になりました。講義の主担当教員であった田中先生は、自分の担当回以外の講義にも全部出席され、それにならってか、当時CIDIRに所属していた他の先生方も聽講されていました。しかし、若輩者の私からすると、教室の後ろに田中先生はじめスペシャリストの先生方がずらり並んでいる中で講義をするわけで、毎回緊張していました。中でも、田中先生の講義は大変興味深く、90分の時間があつたという間でした。私が授業中に少しほーっとしていたりすると、だいたい田中先生から「大原先生、どう思われますか?」という不意打ち質問が飛んできて、油断のならない授業であったことも、今では良い思い出です。私自身が講義を行う際には、話したことや見せたい図表などが多くあり、てんこ盛りの内容にしてしまいがちだったのですが、田中先生の講義は学生に問い合わせ、考えさせるような示唆に富む内容であり、講義の手法としても大変勉強になりました。

私が現在所属している土木研究所水災害・リスクマネジメント国際センター(iCHARM)は、政策研究大学院大学の防災学プログラムとして、アジア・ラテンアメリカ・アフリカ等の途上国への行政機関からの研修生の教育・研修を行っています。私自身も、これまでに修士課程・博士課程の計15名の指導に携わってきました。講義や指導で学生に向き合う時や講義のスライドを準備する時、いつも田中先生のことを思い出します。田中先生のように学生に深く考えさせる講義を提供できるか、私にとっては毎回が試練なのですが、今後も、少しでも学んだことを生かしていけたらと思っています。

田中先生のますますのご多幸、ご発展をお祈りしています。



第1期メンバー (CIDIR ニュースレター第1号(2008.8.1)より)

## 田中淳先生が引っ張ってきた日本の防災対策

国土館大学防災・救急救助総合研究所 教授 山崎 登

田中淳先生は災害情報のあり方で日本の防災対策を牽引されてこられた。2017年まで、私はNHKで自然災害と防災を担当する解説委員をしていたが、気象庁や国土交通省などの新しい災害情報を考える検討会で田中先生にお会いする機会が多くあった。そしてきめ細かく、わかりやすい情報を出すことに尽力された田中先生の強い気持ちに教えられた。

最近、様々な自然災害の分野で、被害を減らすための情報の役割が重くなっている。背景にあるのは、想定を超える東日本大震災の発生や西日本豪雨や台風19号災害のような豪雨が降るようになり、従来の防災対策だけで住民の安全を確保することが難しくなったためだ。そこで危険が迫った地域の住民に避難してもらおう、この10年ほどの間に危険を知らせる情報の整備が次々に進められた。

たとえば「計画高水位」や「警戒水位」という河川管理側の目線の名称しかなかった河川の水位の名称が、2007年に「避難判断水位」や「氾濫危険水位」という住民の目線に立った名称に変わった。同じ年に、地震の大きな揺れの前に揺れを知らせる緊急地震速報と火山の活動度と警戒範囲がセットになった噴火警報が始まった。その後も2008年には大規模な土砂災害の危険性が迫っていることを知らせる「土砂災害警戒情報」、竜巻がいつ発生してもおかしくないことを伝える「竜巻注意情報」、2013年には重大な災害が起こる恐れがあることを知らせる「特別警報」などが作られた。それらの災害情報の検討会の多くで田中先生は座長を務められ、情報の整備に向けた議論を引っ張られたのだ。

また熊本地震や西日本豪雨などの災害現場に一緒に行き、様々な意見や感想などをうかがう機会もあった。その際、印象深かったのは、災害弱者と呼ばれる高齢者や障害者などへの優しい目線だ。先生は、災害が常に弱い立場の人々に大きな被害をもたらすことを防災対策を考える基本にされていた。

高齢化社会の急速な進展によって、高齢者など災害弱者が犠牲になる割合が増している。今後は情報を出す側だけでなく、受け取る側のリテラシーを高めるとともに、高齢者などに配慮した社会のセーフティネットを考えなくてはいけない。だからこそ田中先生にはこれからも被災者に寄り添った目線で、この国の防災対策を引っ張つていって欲しいと願っている。

## 現場では「アリ」に 会議では「トリ」に

日本テレビ放送網(株)  
報道局ニュースセンター専任部長 谷原 和憲

田中先生に初めてお世話になったのは先生が文教大学の頃。神奈川県茅ヶ崎市のキャンパスまで行って、いわゆる専門家の声のインタビュー収録をお願いした。テーマは、やはり「災害弱者」だったと思う。取材をしたのは午後、それを夕方のニュースに入れると話すと「どうやって間に合わせるの?」に興味津々、「テープの映像を電波で飛ばすんです。箱根駅伝中継のノウハウがあるから」と答えると納得。

その後、田中先生は箱根駅伝強豪校の東洋大学へ。2004年、新潟中越地震発生から4日目、『きょうの出来事』のスタジオに来ていただいた。現場からの報告を聞いてもら、「いま被災地で大切なこと」の解説をお願いすると、次々と言葉が飛び出す。「発生直後とは違う個別のニーズを聞いて“つなぐ”段階」「避難所での高齢者や障害者は“気兼ね”がストレスに」「日常を取り戻すことが大事、避難所では被災者にも役割を、子どもには遊び場を」・・・被災地が遠い東京のスタジオからでも、被災した人たちの気持ちを汲み、現場レベルの「蟻の目線」で課題を見つけることの大切さを教えていただいた。

そして2011年の東日本大震災では、みずから「蟻」になってくださった。発生翌日『NEWS ZERO』のキャスターとともに被災地へ。宮城県の津波被災現場を取材したあと石巻市からの現場中継で「今後の救援のあり方」を伝えてもらった。この時も高齢者や弱者への配慮を訴えた。

このように、取材でコメントをお願いすると、常に現場の目線から「一番大変な人」に成り代わって発言する田中先生だが、同じ災害の話でも、省庁が設置した検討会の場では、もうひとつの顔を見る。対処療法だけにとらわれず、大所高所から俯瞰する「鳥の目線」からの発言だ。

最近、省庁の検討会で多いのは、大きな災害が起きたあと、その教訓をあぶり出し、次の災害までに新たな対策を打ち出そうというやり方だ。スピード感重視は悪くないが、災害頻発国ゆえの防災官庁の性なのか、どうしてもすぐ出来ることに議論が偏りがちになっている。そんな時、田中先生が釘を刺すように発言するのが「当面の対策ばかりではなく、中長期の課題や対応も検討しましょう」。テレビの仕事もその場その場の対応を優先しがち。目の前ばかり見ていてはダメ、といつも教えられる。

検討会の席順は五十音順が主流。なので先生の隣となる幸運に恵まれている。隣だから公式発言だけでなく、先生の“つぶやき”を聞くことが多い。

これからも、もう少し、こっそり勉強させてください。

## 避難ガイドラインの歩みで

国土交通省水管理・国土保全局河川計画課長 廣瀬 昌由

私が、田中先生のご指導をうけるようになったのは、新潟・福島豪雨等で水害が相次いだ平成16年、先生が東洋大学におられた時からと記憶しています。中小河川で、特に高齢の方が多いお亡くなりになり、国交省では水防法の改正を射程に設置した検討会の委員に先生にご就任いただき、ご指導いただいたのが最初です。同時に内閣府にも、故廣井先生を座長とする「集中豪雨時等における情報伝達及び高齢者等の避難支援に関する検討会」が設置され、先生にも参加いただき、国交省も参考して、「避難勧告等の判断・伝達マニュアル作成ガイドライン」(以下、「避難ガイドライン」)を策定しました。

一連の検討では、私個人としては、内閣府、消防庁等と連携を図るのが初めてであり、災害にかかる社会学や情報学の先生方と本格的な関わりを持たせていただけたことが新鮮でした。検討会では、委員の方と一緒に現地調査を行いましたが、田中先生が、自治体との意見交換会でも丁寧で核心をつく質問をされていましたこと、車中などで気さくにいろいろと指導いただいたことを、つい、この前のように思い出します。

その後も、先生にはいろんな場面でお世話になりましたが、平成27年関東・東北豪雨での常総市等での被害、平成28年台風10号での岩泉町での被害など、ここ数年、毎年のように各地で水害等が発生したことから、政府として防災対策の充実を図るために、内閣府に「水害時の避難・応急対策検討ワーキンググループ」や「避難勧告等の判断・伝達マニュアル作成ガイドラインに関する検討会」を設置し、いずれも先生に座長をお願いしました。先生には、座長として議論をまとめていただきましたが、「現場」を重要視される姿勢から、必ず現地調査が組まれました。

検討会を踏まえた具体的な取組の一つとして、「避難ガイドライン」を抜本的に見直すことになりましたが、私が内閣府でその担当をすることになったことに、めぐりあわせを感じました。故廣井先生のご指導で具体的な歩みを始めた取組が、田中先生のご指導で充実が図られていると痛感し、それに携われたことに感謝する一方、責任も痛感しています。その後も、国交省、内閣府では、先生には、様々な局面でお世話になっていますが、地球温暖化の影響が顕在化している中、社会全体でソフト・ハードの両面から防災対策に取り組むことがより必要かと思っており、引き続きのご指導をいただきたいと思っています。

## トータルとしてどうなのか

気象庁観測部長 弟子丸 卓也

気象庁では平成18年度より田中淳教授に気象業務の評価に関する懇談会に委員として、また、平成20年度からは同懇談会の座長を務めていただき、気象行政に関して幅広くご助言をいただいている。加えて、田中教授には気象、地震、津波、火山など気象庁の各業務分野の検討会で座長などを務めていただき、幅広い視野と高い見識に基づく数多くの貴重な助言、ご指導をいただいてきた。ここに改めて感謝申し上げたい。

平成の後半、我が国は多くの顕著な自然災害に見舞われてきた。竜巻や小河川の急な増水など発達した積乱雲にともなう時空間的に極小スケールの現象による災害、逆に、平成23年の東北地方太平洋沖地震と津波、同年の台風第12号による豪雨災害などの巨大スケールの現象による災害も発生した。メソスケールの線状降水帯による災害も繰り返し発生している。

度重なる自然災害に対し、気象庁では様々な技術の高度化と情報の改善に努めてきた。気象に限っても、数値予報の精度は着実に上がり、台風の予測精度も向上している。気象警報は市区町村ごとに発表され、土砂災害、中小河川の洪水、内水浸水の危険度がメッシュデータとして危険区域と重ね合わせて見られるようになった。

技術の進歩を背景とした情報改善に際しては田中教授から多くのご助言をいただきましたが、根底にあるのは「トータルとしてどうなのか」という観点であった。防災情報や制度全体が整合的・包括的・シームレスになっているか、また国民・利用者からどう見えるのか、というのが常に命題として与えられたように感じています。それには、情報の内容のみならず、発表のあり方や、受け手の理解なども含まれる。

いま、気象庁は市町村を対象とした「あなたの町の予報官」を通じた地域との連携強化や、非常災害における「気象庁防災対応支援チーム(JETT)」による被災市町村へのきめ細かな情報提供に取り組んでいます。気象予測精度向上を背景により早い時点での記者会見を実施している。昨年は各地で気象台と地方整備局等との共同記者会見も実施できた。このように気象庁は情報作成・発表から、より活用されるための取り組みまで幅広く地域や情報利用者に向き合うよう変化を遂げている。

一方、昨年の台風第19号では再び多くの人が失われることとなり、また、大都市の広域避難も運用の難しさが認識されることとなった。気象予測精度の向上と防災気象情報の高度化には未だ多くの挑戦すべき課題が残されている。これからも引き続き高い視点からのご指導、ご助言をお願いしたい。

## 田中先生ご退任への寄稿

東京電力ホールディングス株式会社 経営企画ユニット総務・法務室(防災担当)兼  
東京オリンピック・パラリンピックプロジェクト統括室

矢田 照博

田中先生がご退任を迎えるということで、寄稿のお声掛けをいただきました。

私が田中先生と初めてお会いしたのはCIDIRが発足して丁度1年を迎える2009年7月で、東京電力の非常災害対応に関する業務を担うことになり、毎月、開催されるライフライン・マスコミ連携講座へ出席させていただいたことがきっかけです。ライフライン・マスコミ連携講座では、災害に対する研究内容の紹介をはじめ、全国各地で発生した様々な災害に対し、田中先生をはじめCIDIRメンバーの先生方がいち早く現地を訪れ、現地での被害状況やライフラインの復旧、マスコミや自治体からの住民への情報発信に対して住民がどう受け止めたのかなど、私たちの目線では気付かない住民目線に立った災害に対する復旧や情報発信への課題や提言をいたしました。

また、CIDIRを通じ各社防災担当者と毎月顔を合わせることでコミュニケーションが図られています。田中先生が、顔の見える関係を構築することが災害対応として重要な認識され、相乗効果として期待されていたのではないかと思いますが、目論見通り大変すばらしい連携が発足当初から図られており、現在においても継続していると思います。

東日本大震災後の2012年に異動のためCIDIRを離れることになりましたが、2018年に再び戻ってきた際、田中先生から「お帰りなさい、芳賀さん出戻り組がもう一人増えましたよ」と嬉しそうにお話された表情が大変印象的であり、私自身もとても嬉しかったです。

昨年の台風第15号では千葉県を中心として大規模な停電が発生し、約16日間にもおよぶ長期間の停電を発生させてしまいました。

当社として社内検証委員会を設置した際、社外有識者として参画いただいた田中先生より「災害時においては、状況が深刻な場所ほど、そこからの情報は上がってこないと考えるべき」とのご指摘をいただき、状況が分からなくなることを伝えることも情報発信であることに気付かされました。

いよいよ7月より東京2020オリンピック・パラリンピック大会が開催されます。田中先生におかれましては、世界が注目する熱い瞬間を心置きなく楽しんでいただければと思います。私たちは、電力供給の観点から、大会をしっかりとサポートできるよう、グループ一丸となって全力で取り組んで参ります。

田中先生、長い間大変お疲れ様でした。そして大変お世話になりました。